神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 重紐現象の通時的研究


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-06-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2632 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔課程博士用　様式２〕

# 論　文　内　容　の　要　旨

学位申請者氏名　　季鈞菲

重紐問題は、中国語音韻史研究において非常にユニークな課題である。本稿は、重紐現象を通時的、多面的、総合的に考察することを目的としたものである。所論の範囲は中古期と近世期であり、主に考察する資料は『徐邈反切』から『集韻』までの 17 種の反切資料である。ここで、本稿の諸節における所論をまとめ、それを以て要旨とする。

第１部　まず重紐現象の発見については、二点の結論がある。一、江永、陳澧両氏ともペアになる重紐反切の存在を発見したが、その発見過程及びこの現象に対する理解の深さから言うと、陳氏の方に一層音韻学上の意義があると思われる。二、江戸時代の本居宣長と石塚龍麿両氏とも直接的に重紐問題を研究の目的とはしていないが、重紐問題の確認に対して、非常に大きな貢献をしている。

次に中古重紐両類の区別については、二点の結論が挙げられる。一、中古重紐両類の間には実質的な音韻的対立がある。二、中古重紐両類の違いは、音韻論のレベルでは、唇牙喉音声母の口蓋化の有無によって区別される。音声レベルにおける差異の実態が如何なるものであったかについて、資料に応じて頭子音にある可能性もあれば、拗介音、主母音にある可能性もある。

第 2 部　まず「類相関」の現象については、結論が二点あげられる。第一に、「類相関」現象は殆どの中古音資料において成立する。第二に、音韻論的観点から言うと、「類相関」現象の成立原因は A 類声母には強い口蓋性があり、B 類声母には口蓋性がないか、または弱い口蓋性しかなく、C 類声母はどちらにもなり得る自由型だということである。

次に、庚清韻の問題については、結論が二点挙げられる。一、江南読書音における庚三-清韻の混用反切が庚三の唇牙喉音と荘組字、及び清韻の知組と来母字に集中している現象は、『切韻』、『玉篇』、『博雅音』、『玄応音義』など成書年代が比較的早い時期の文献に見られる。このような混用が生じたのは、重紐の類帰属に関し、「中間的」性質を持つ知組、来母を声母とする字が用いられたこと、そして舌歯音声母下では庚三（B 類の唇牙喉音字と B 類寄りの荘組字しかない）と清韻の韻母の差異が他の声母の場合と比べ、より小さかったことに原因がある。二、唐代の詩文押韻における庚清同用の程度がほぼ同時期の反切資料と一致しない現象は、南北語音の違いに原因がある。またそれ以外に、唐代の貢挙に関する功令制度の影響、つまり規範が齎した影響も考えられる。

また、幽韻の問題については、結論が二点挙げられる。第一に、幽韻唇音字は各資料において均しく B 類である。第二に、厳密に言えば、平声幽韻の牙喉音字は江南読書音系統においては B 類→A 類の通時的変化を蒙ったのに対して、北方音系統においては A 類→B 類の通時的変化を蒙った。

その次に、音韻資料の節において、隋代に成立した『博雅音』と後晋代に成立した『可洪音義』について考察した。この二点の文献については結論が三点挙げられる。第一に、重紐反切における類相関が成り立つ。第二に、A 類と中古四等、B 類と C 類の合流が見られる。第三に、『博雅音』において、知組は B 類音節に近く、来母音節は「中性的」であるが、『可洪音義』においては、来母字は B 類的であり、知組の方は、従来の説と異なり、A 類的な振る舞いを示していることを指摘した。

そして、近世音資料の『古今韻会挙要』と『蒙古字韻』における重紐対立の状況を比較して、近

世重紐韻変遷の特徴について次の五点を挙げている。一、近世だけでなく、A 類拗介音の強い口蓋性による合口性に対する抑制作用は中古以来一貫して重紐両類合流の一要因である。二、陽声韻尾を持つ重紐韻の合流の進展は、陰声韻尾とゼロ韻尾を持つ重紐韻よりも速やかである。三、止摂重紐韻は合流が一番緩慢な韻類である。四、入声韻の合流方式は本来相配する陽声韻のそれとは一致せず、舒声化して派入先の陰声韻の合流傾向と一致する。五、合流の方向から見ると、必ずしも全部 B 類から A 類へ合流するわけではない。

最後に、域外対音として、主に日本漢音における状況について考察した。結論は二点挙げられる。一、中古重紐両類の対立は日本漢音にも部分的ながら支韻と脂韻の牙喉音合口字における「イ」と「キ」の対立、および仙韻、庚三韻の牙喉音合口字における「エ」と「ヱ」の対立に反映されている。二、このような対立を生んだ原因は、中古 A 類字の強い口蓋性を持つ拗介音がもともとの合口性を阻害したのに対して、口蓋性の弱い拗介音の中古 B 類字はその合口性が損なわれなかったということである。

第 3 部　17 種の中古音資料における重紐反切の下字と上字の分布状況について考察した。結論として次の四点が挙げられる。一、反切下字の混用状況から見ると、帰字の類帰属の変化は、陽声韻尾を持つ韻の方が陰性韻尾及びゼロ韻尾を持つ韻よりも早く現れる。二、A 類下字と B 類下字に絞って言うと、殆ど全ての資料において、A 類下字と B 類下字がはっきりと使い分けられている。そして、この事情は中古早期の資料から、晩期の『集韻』まで変わっていない。三、反切上字の混用状況から見ると、陽声韻尾を持つ韻の類帰属変化は陰声韻尾よりも速い。四、A 類、B 類上字に絞って言うと、殆ど全ての資料において、帰字の類帰属を決定する機能は強力である。そして、この機能は『慧琳音義』に特に顕著である。また、肝要な重紐韻の変遷過程について、結論として次の四点が挙げられる。一、時間の流れに沿って、反切上字の重紐両類を区別する機能がますます強くなっていくのに対して、反切下字の重紐両類を区別する機能はますます弱くなる。結論二、陰声韻尾/-V/やゼロ韻尾/-ø/に比べ、陽声韻尾/-N/を持つ音節の構造が担っている音声の情報がもっと多いため、重紐両類の対立の保存が、もっともされにくい韻類と言える。三、既に/u/介音がある場合、唇をすぼめる調音努力が強い拗介音と弱い拗介音の区別を曖昧にしてしまう。四、第一段階、声母の弁別機能が強くなり、韻母部分の弁別能力が弱くなる（前中古期）。第二段階、陽声韻尾を持つ韻をはじめ、牙喉音合口字、唇音字、牙喉音開口字において次第に重紐両類の区別が消失していく（中古期～『字韻』、『挙要』の時代）。第三段階、ごく一部の方言を除いて、重紐両類の区別はほぼ消失する（『字韻』、『挙要』以降）。

第 4 部　重紐現象に関わる三つの問題について述べた。まず、一等上字の問題について、結論としては以下の二点が挙げられる。一、重紐反切の上字となる一等字には二つの特徴があり、それは即ち、「易識・易読・易写」と「合口的性格」である。二、『集韻』における一等上字多用現象は一等韻の音韻変化の結果ではなく、『集韻』自身が大量の古音、異音、方音などの「異質成分」を代表する反切を、字面を改めずにそのまま吸収した結果である。

次に、重紐韻における舌歯音音節が音声的に見て、重紐対立のいずれに属するかということについては、次の結論が挙げられる。精組、章組、日母、以母に属する字は重紐 A 類の性質を持ち、荘組、知組、来母、云母に属する字は重紐 B 類の性質を持つ。

最後に、分向合流の問題について、B 類帰字に対する「C+C」型、A 類帰字に対する「C+四」型いずれについても、その発生は諸文献の中では江南読書音資料にその先駆けを見ることができる。